

氏名	中村 恒克
ヨミガナ	ナカムラ ツネヨシ
学位の種類	博士（文化財）
学位記番号	博美第517号
学位授与年月日	平成28年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 宝菩提院菩薩半跏像および道明寺十一面観音菩薩立像の作風表現および造像技法における唐の影響について 一両像の模刻制作を通して— 〈作品〉 「京都府宝菩提院菩薩半跏像」模刻

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	藪内 佐斗司
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	松田 誠一郎
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	深井 隆
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	森 淳一

（論文内容の要旨）

京都市の宝菩提院願徳寺に安置される菩薩半跏像（以下、宝菩提院像と略称）および大阪府藤井寺市の道明寺に安置される十一面観音菩薩立像（以下、道明寺像と略称）は、共に平安時代初期に造像されたと考えられており、一材から像の大部分を彫出し、精緻な彫りくちをみせる素地仕上げの檀像彫刻である。黒目に別材を嵌入する表現や、風動表現と呼ばれる衣と肉身の美しさを主張する表現といった共通性がみられ、これらについて諸先学により唐の影響が指摘されてきた。両像は魅力的な像が多く造像された平安時代初期の中でも、特に優れた出来栄をみせる像であると考えられる。それにも関わらず宝菩提院像は本来の尊名が不明であり、また両像の詳しい伝来は不明である。またこれまで両像に指摘されてきた唐の影響については、形式や作風に関するものが主であり、造像技法について述べられることはあまりなかった。

本研究では、3次元の正確な形状を測定することが可能な3Dレーザースキャニング計測および熟覧調査をもとにした両像の模刻制作を通して、造像技法および構造について考察する。そこから得られた知見をもとに、同時代の日本の作例にはみられない特殊な表現および技法を指摘する。また、宝菩提院像とその前後に造像されたとされる作例を比較することで、同時期における宝菩提院像の相対的な位置づけを考察する。

宝菩提院像の特殊な表現について、蓮弁の葺き方が同時代の日本の作例にはみられず、唐の作例にみられるものであることを指摘する。また宝菩提院像は上半身をひねる姿勢であり、三尊像の右脇侍であった可能性を指摘する。日本における同時期の作例には上半身をひねる姿勢の脇侍像がみあたらないことから、宝菩提院像は日本において特殊な姿勢の作例であると考えられる。しかし唐においてはまっすぐ坐る姿勢のものや、首を本尊の方向にひねる作例もあり、日本で現在見られる脇侍像とは異なる姿勢の作例があったことがうかがえ、宝菩提院像が唐の脇侍像の形式から影響を受けている可能性を指摘する。

技法面では両像の右前膊半より先の構造について、あえて彫りづらい構造が選択されていることをのべ、この構造が木彫ではあまりみられず、石彫にみられるものであることを指摘する。

総括では、本論で述べた宝菩提院像の特徴をふまえ、宝菩提院像とその前後に造像されたとされる作例を比較することで、同時代における宝菩提院像の相対的な位置づけを考察する。宝菩提院像以前に造像された作例として、8世紀の第3四半期に造像されたとされる唐招提寺木彫群をあげる。また、宝菩提院像以後に造像されたとされる像として、法華寺十一面観音菩薩立像（以下、法華寺像と略称）をあげる。

奈良時代後半から造られはじめる木彫の初期作例とされる唐招提寺木彫群は、当時日本に新しく伝わった唐様式が反映されている。またその表現について、木彫以外で造られた造形を木彫に移したような代替的な

ものであることが指摘されている。この唐招提寺木彫群や中国の小檀像の影響を受け木彫は広まっていったとされ、平安時代初期には多様な作風の造像がなされるようになる。その後9世紀半ばに、それまでの表現をある程度統一した承和様式が生まれ、法華寺像のような衣文の稜を鋭くし、布端を薄く鋭く仕上げる木の材質をいかした表現が生まれる。このことから奈良時代に木彫が造られ始めたころの作例では、木彫以外で造られた造形を木に移したような表現がなされ、その後木彫が多く造られるにつれ、木の材質に対する理解が深まり、木彫技法が成熟していったことがうかがえる。

宝菩提院像は作風表現に唐の影響が指摘されている。また、衣文を深く彫り込む粘りのある表現は、塑像のような自由な表現であり、必ずしも木彫でなくてもよい表現であると感じる。本論で指摘した右前膊の構造も木彫の利点を活かさないものである。このように木の材質を活かした造形表現を行わない部分がみられることは、唐招提寺木彫群と同様の造像姿勢であると考えられる。このことから宝菩提院像は木彫が成立する初期の段階に位置する作例であることが推測される。しかし、宝菩提院像と唐招提寺木彫群の作風表現が全く異なるものであることから、唐彫刻の影響が重層的に日本に伝わり、それらの影響を受けることで平安時代初期の多様な作風表現の像が生まれたものと考えられる。

(論文審査結果の要旨)

申請者・中村恒克氏の研究は、卓越した彫技を示す宝菩提院（京都府京都市西京区大原野南春日町）菩薩半跏像（国宝、以下、「宝菩提院像」と略称）と道明寺（大阪府藤井寺市道明寺）十一面観音菩薩立像（国宝、以下、「道明寺像」と略称）の模刻制作を通じて、造形表現と制作技法の特徴を明らかにし、両像の平安前期彫刻史上における位置づけを試みたものである。

両像の作品調査においては、肉眼による精査、デジタル一眼レフカメラによる撮影に加えて、3Dレーザー・スキャニングによる測量を実施している。調査知見とデジタルカメラ画像に加えて、3D立体画像を活用することにより、材料となる丸太からの木取り法や、別材刳付部や後補部の特定など、両像の構造や保存状態に関する詳細な検討をおこない、精密で信頼性の高い基礎データを構築している。

模刻制作は、こうした作品データを根拠に、古典技法による制作工程を合理的に復元して行われている。両像では、通常の刀では刃先が入らない狭隘な部分において透かし彫りなどの高度な技法が用いられるが、これに適した工具の復元が行われている点も本研究の貴重な成果のひとつといえる。また、宝菩提院像について、懸裳にあらわされた蓮弁のかたちと7-9世紀の中国・日本の作例検討を根拠として蓮華座を復元制作したことも重要な研究成果といえよう。

造形表現の面では、まず、宝菩提院像について、三尊像の右脇侍像として制作された可能性が高いことを論証した点が注目される。宝菩提院像に関しては、独尊像説と三尊右脇侍像説の両説が提示されてきたが、本論では、精密な3D立体画像の観察を通して、頭部・上半身の正中線と懸裳・背面腰帯を基準とする下半身・台座の正中線との間に微妙なズレがあることを指摘し、左右非対称な肉身表現の特徴や、1本の丸太からの2体の脇侍像をとる合理的な木取り案をも勘案して、三尊右脇侍説を積極的に支持している。その論証は具体的で説得力にとみ、宝菩提院像の当初形態について新知見を提示したものと評価できる。

制作技法の面では、本体から離れた右腕を手首まで（宝菩提院像）、ないしは手先まで（道明寺像）を本体と共木より彫出する両像の技法について、石彫像との関係を強調した点が特筆される。腕と脚部との間にできるわずかな部分を透かし彫りする技術的な困難（宝菩提院像）や、腕によって前後の彫刻面が分断される表現上の困難（道明寺像）をおかしてまでこのような構造を採用した背景に、制作中の振動によって遊離部などが割損しやすい石彫の制作に通じた作家の感性を想定する立論である。両像の技法について、石彫を介在させて唐代彫刻との関係性を指摘した点は、新たな見解といえる。その上で、非木彫的な表現技法の存在を支えに、奈良時代後半の唐招提寺木彫像との連続性を説き、法華寺十一面観音像に代表される平安時代前期木彫像の完成形態より前に両像を定位する。この様式論も、技法面における新見解を、8世紀後半から9世紀中葉に至る日本彫刻史の展開に整合的に位置づけたものと理解することができる。

両像の制作については、唐代の檀像彫刻との関係を含め、なお検討を加えるべき課題を残している。しかし、最新の3D画像と精緻な復元模刻制作に基づいた本論文は、今後の平安前期彫刻史の研究に寄与する新知

見を豊富に含んだものと評価でき、きわめて優れた研究であると考えられる。

(作品審査結果の要旨)

京都府、宝菩提院願徳寺蔵、菩薩半跏像を模刻制作した。修了制作で、大阪府、道明寺蔵、十一面観音像の模刻制作をしている。平安時代初期の多くの優れた一木造の仏像が、存在感の強い姿を現しているなかで、この二つの像は、存在感に加えて、細部まで丁寧に彫り込まれていることで、特に高い彫刻技術の仏師によるものであると評価されている像である。模刻制作にあたり、3度にわたり、目視調査、写真撮影、3Dレーザースキャニング計測、蛍光X線分析を行った。

本像は、櫃の一木造りと言われているが、目視調査により、正面前に材の芯を外していることを発見した。そのため直径130cmを超える櫃が必要とされるわけであるが、現在においては、入手困難のため、できる限りの大木を探しだし、二材を接合して一木と見立てて模刻した。

この像は、もともと形状から、唐の影響があると言われていたが、日々、対象と向き合い、模刻制作をすることで中村君は、以下の新しい知見も得た。

- 1、右腕が、体と接して彫出す方法は、石彫の技法からくるもので、唐の石仏の影響が像の構造からもあると指摘した。
- 2、像の正中と、正面の中央蓮弁の先の位置、背面の中心にあるべき腰帯の装飾のラインが、同一線上になく像はやや左を向くことで、右脇侍でないかと推測した。また、芯を外し、木裏を正面に持ってきたことは、丸太を半割りにして、脇侍二体を作ったという想定も可能にする。
- 3、蓮弁の葺き方が、同時代の日本にない作例であり、唐の仏像の作例にあるものに似ることを指摘した。

欠損している蓮弁も復元した。最上級の高い技術で作られたこの像を、中村君の類い稀な正確なデザイン力と、彫刻の技術で見事に完成させ、優れた模刻像になった。審査員一同高く評価するものである。

(総合審査結果の要旨)

わが国の仏像における木彫技法のなかで、もっとも精緻な技巧を示す平安時代劈頭の檀像風一木彫成像是、極めて高い伎倆によって制作され、その像を再現制作することは至難といえる。美術史的には、この時代の作例が唐の影響を強く受けているという指摘はかねてよりあったが、それが具体的にどのような影響を受けていたのかについての検証が、実技者の側からほとんどなされてこなかった。それはまさにその高度な技巧を再現することの困難さによるものといえる。

中村恒克は、当研究室においてこの時代の仏像の模刻研究を一貫して手がけ、修士課程では道明寺十一面観音菩薩立像の模刻制作を行い、見事に再現した。そしてその経験を踏まえて博士後期課程で、標記のテーマに沿って宝菩提院菩薩半跏像の模刻研究を行いながら、道明寺像との木彫表現を比較研究し、この時代にもたらされた唐風彫刻がわが国にどのように受容され展開していったかを、実技者の視点から緻密に検討を重ね、論考を展開していった。

彼は、1)本像の右前膊と脚部が同一材から彫出されていることなどの制作技法が石彫技法と共通すること、2)半割りにした巨木の木裏を正面にする本像の木取りや右脚を踏み下げる姿形から三尊形式の右脇侍であった可能性が高いこと、3)他の一木彫成像是との比較によって、奈良時代末からこの時代にかけて盛んになった木彫技法が、唐から重層的に伝えられたことなどを、模刻制作を通じて検証し指摘している。そして論文において、先行研究をよく参考にしながら、その仮説を明快に論証したことは高く評価できる。

1)については、中国の石造彫刻と比較しながら本像が石造的表現を用いていることなどを指摘し、唐から渡ってきた彫刻家の手になる可能性が高いことを示し、2)については、木心が像の前に位置し、正面の蓮台が円周の一部ではなく直線状になっていることから推考している。3)については、捻塑的造形の特徴によって、唐招提寺などの同時代の木彫群との造形の明らかな違いを指摘している。

また実技制作においては、修士課程で行った道明寺像模刻によって、木彫家としての見事な資質を示したが、博士課程における宝菩提院像の模刻制作において、更に高度な木彫技術を獲得したことを証明した。た

だし、作品が素木仕上げとなり檀色仕上げまで到達しなかったことがやや惜しまれる。これらのことを総合的に判断して表記の評価とした。中村恒克を、将来の文化財保存学分野に大いに貢献する逸材として、今後の活動を期待したい。

なお、口頭試問によって、当該分野の博士号に見合う一般教養も十分に有していることを確認した。